

- 目次 P1 バイク式の車載浄水装置は、世界初。被災地の人々の命の糧をつくり出します
- P2~P4 奨学生修了者からの「奨学金で勉強できた、その後の私」
Mr.BUDI RASWAN 中央政府海洋漁業省の中堅で頑張っています。
Mr.RIZAL TAIFIKURAHMAN 生き方のバランスをとって将来に備えてきました
- P5~P7 世界初コンパクト車載浄水機が、被災地の人々の健康を守る。
- P8 「日本インドネシア市民友好フェスティバル」の趣旨が浸透してきました



C.P.I.は、現地政府社会活動省と手を携えて、被災地救援に画期的な浄水装置を導入しました

被災地の細い道路にも入れて、人々に美味しい飲料水を供給できます

本誌ページ5以下に、インドネシアの大災害救援に入った詳細を説明します。この写真はC.P.I. Japan が現地大学と共同開発した画期的な車載浄水装置です。とくに、大きな道路から離れて続けて住まなければならない貧しい人々

にとって、近くの川や池から取水して美味しい飲料水を供給できる、安全で安心な浄水装置は、被災地で健康に不安のある人々にとって、「救いの神」とも言われ、ありがたいことだと思っています。

ロゴマークを、この移動する車載浄水装置につけて戴きました

C.P.I.の30年の歴史で初めて、ロゴマークを入れて戴きました。C.P.I. JAPAN ロゴの右にあるマークは、社会活動省のシンボルマークです。協働して救援にあたっていることを示します。今後、国際協力応援団に集った皆様のご寄付で建造していくときは、同様のロゴを入れます。

企業や個人が、一基あたり300万円の資金全額をご寄付くださったときには、ロゴマークを戴いて、浄水装置のボックスに書き入れることにしております。



以下に、手続きの簡単な寄付サイトがあります。

<http://www.cpi-mate.gr.jp> 内

「日本インドネシア市民友好」のサイトに行く

バナーをクリック

奨学生になってからの歩み

寄稿 MR.BUDI RASWAN

2004年 ボゴール農業大学卒業

現職 中央政府海洋漁業省

ひとことご挨拶 中央政府海洋漁業省の中堅として頑張っています。



C.P.I.小西会長
との最近の写真
(知人の結婚式で)

私は、38年前にチアンジュールに生まれました。私が中学にいたとき、1993年にC.P.I.とPPKIJによる奨学生となりました。その頃、C.P.I.とPPKIJは、「大きな家族」と言って

いて、仲間が大勢いることは、いつも励まされました。「KOKORO NO TOMO」という、奨学生修了者の励まし合い SNS を主宰しているのは、その頃の経験があるからです。

私を育てて下さった日本の教育里親さんに、これまでのことをお話ししたいです

No.3196が私のC.P.I.奨学生番号で、渡辺隆一さん(教育里親さん番号は3004)という方が教育里親さんでした。ずっと離れている日本に、私を励まして下さる方がおられることは、とても嬉しいことでしたが、残念ながらお会いしたことはありませんでした。

でも、いまの私を育てて下さったことは、忘れたことはありません。この手紙は、日本の教育里親さんに、私が中央政府で働くまでの若い頃の話を知って戴きたいと思って書いてみました。

学生時代のこと

Madrasah Aliyah Negeri (MAN) Cianjur というイスラム高校に入学したとき、多くのことを学びましたが、中でも高校連合を束ねる活動や、科学雑誌の仕事は良い経験になりました。高校を出て、ボゴール農業大学(IPB)に入学できました。そこで、漁業海洋学に出会

い「漁業に於ける社会経済学」を学びました。IPBではまた、旅行業実務や高校経営実務を教えるといった経験を積むことができました。その結果、高校の副校長をしたり、IPBの短期コースの講師をしたりすることができました。学生の身ながら得がたい経験でした。

大学で学んだ開発手法を大切に、中央政府で働きました

2004年にIPBを卒業し、その年に、Ministry of Marine Affairs and Fisheries (MMAF=海洋漁業省)に職を得ました。私の部署の目標は、Coastal Community Economic Empowerment programs(インドネシア語の略称PEMP=沿岸地域経済振興プログラム)に関しての、中央政府および地方政府の予算基準をつくることでした。零細および中小企

業のビジネス開発を助けるための調査事業として、300地域800村に対して行いました。2008年に政府の奨学金を得て、IPBとドイツ・ブレーメン大学の大学院で学びました。海洋及び沿岸資源マネジメントについての理論を学びたいと考えたのです。2年間の海外の学びの成果として、南スラウェシ州での「住民参加型海洋資源保護マネジメント」の論文を書き、2010年に職場に復帰しました。

インドネシアでは、近年になって、漁業の改善が模索されています。

2010年から2016年までの7年間、沿岸コミュニティの開発を、国連International Fund for Agricultural Development (IFAD)と協働して、13の地域で行いました。それは、持

続的沿岸資源マネジメントによって沿岸漁村を向上させる仕事でした。同じ頃、外国での仕事にも恵まれました。以下に、主なものを書いてみます。

生き方のバランスをとって将来に備えることを教えてくれた奨学生時代

寄稿 MR.RIZAL TAIFILURAHMAN

現職 大学教授・農業経済専門家・様々な協会での活動家
ひとことご挨拶 アカデミックと実践のバランスをとっています。



私は、M. Rizal Taufikurahman といいます。リザルと読んで下さい。いまのキャリアを話す前に、C.P.I と PPKIJ の奨学生になったときのことをお話したいです。西ジャワのチアンジュールというところは、インドネシアでもイスラム色の濃いところで、お酒は売っていませんし、遊びの空間がない代わりに、自然を楽しむことは存分にできるところです。そのような地域の、イスラム高校で学んだことは、素晴らしい時間だったと思います。1993年、私はC.P.I.の奨学生に選ばれました。教育里親さんは、千葉県岡崎学さんでした。彼はコミュニケー

ションに熱心で、私が書いた手紙にはすぐに返事をくださいました。手紙には、きちんとした日本語が書かれていました。彼とのコミュニケーションを通じて、C.P.I.とPPKIJの奨学制度にある「将来に向けた意欲」というものが感じられ、また、私の勉強の指針を示してもらうこともできました。私は奨学金を戴きながら、最高の状態でイスラム高校を卒業しました。岡崎さんは「日本で学んでみないか、発展の仕方を実際にみることもできるよ」と進めて下さったものです。

1996年に、ボゴール農業大学(IPB)に入学しました。そこで動物繁殖と社会経済学を学びました。その間も、C.P.I.の奨学金を戴き、補習授業に役立ちました。そのおかげで、成績も実務学習もよい成果を出すことができました。

IPBにいたときに、講師および調査技師の助手を務めました。2000年にIPBを卒業すると、農業経済学の卒業生として調査・コンサルタント研究所で働きながら、IPBで教鞭をとることになったのです。

IPBには、卒業生が大学院で学ぶことができる制度がありまして、農業経済の実践を積むことができました。地方にあって自然資源と環境を生かす分野での実践でした。この学校は、講師として働く人々のために、インドネシア政府が資金支援をしていま

す。その中で、2003年にSumma Cum Laude(GPA 3.85)というタイトルで卒業論文を書きました。2004年は24歳で結婚した年でした。その後、3人の子どもと、4人の教育里子の面倒を見ています。

< P2 から続く >

1. 地方活性化を視野に入れた Asia Pacific Regional Workshop
2. 持続的漁業及び島々開発のための Strategic Environment Assessment (SEA).
3. 協力モデル作りのための知識拡散会議
4. 国連 IFAD による、アジア太平洋州における財務マネジメント会議、
5. 持続的漁業に関する会議の数々
6. 日本の大学との仕事で、海洋調査の新しい方法について学びました。

こうした「住民参加型の漁業開発」という手法は、C.P.I.の小西会長が進めてこられた CDD (Community Driven Development=住民参加型開発) 手法と合致しますので、私は、小西会長の推進しておられる「コミュニティカレッジ運動」には大いに賛成で、協力していきたいです。日本の教育里親さんとC.P.I.の皆様の幸福な毎日をお祈り申し上げます。



私と妻と三番目の娘(背面)
座っている左から Dewi (教育里子),
Halya (長女), Raisya (次女)

2007年に、再び大学に戻り、2012年まで博士課程の学生になりました。マイナーな分野での農業経済と政策に関する研究をしたいと考えたからです。インドネシア政府は、奨学金によって研究に期待を寄せて下さいました。

仕事もしました。講師・調査員・コンサルタント・政府と国際機関の農業経済エキスパートとして頑張りました。自分の経歴の来し方を振り返ってみると、3つあげることができます。

第一には、大学講師としての自分です。

第二には、調査員としての自分です。

第三には、専門家組織の活動家としての自分です。

この3つの手綱を上手くバランスしてこれたかなと思います。

大学講師としての経歴は、動物繁殖の講師助手 (1999-2000), 国立大学講師 (2001-2009), Trisakthi 大学講師 (2007-2008), 経済専門大学 (STIE) Pandu Madania Bogor 講師(2005-2007), TAZKIA 大学講師 (2008-2011), Trilogi 大学

講師 (2013-現在) といったところを務めてきました。

現在は、コミュニティサービスの専門家、バイオ工業の専門家、Senator 大学の事務局長を勤め、大学教授協会 の幹事役をしています。

調査員としての経歴は、大学内での調査作業、「the Institute for Development Economic and Finance (INDEF)」での調査が主要になるでしょう。この研究所は、なかなか面白い組織で、何者にも束縛されない提言を政府に

対して行うことができます。政府系企業・民間企業に対する経済面・財務面・公的課題解決のアドバイスを行うわけです。複数の調査会社と手を組んで行うこともあります。

専門家組織の活動家としては、大学教授会の幹事役、理事を務めるいくつかの NGO のこと、インドネシア農業経済協会 (PERHEPI)の

仕事、インドネシア大学講師会 (ADI)の仕事そして「アグリビジネス協会 (AAD)」での仕事などがあります。

こうしたすべての経歴は、その発端が C.P.I.の奨学制度にあったと思います。

とくにチアンジュール建物 (現在の PPKIJ 本部の建物) には、C.P.I.会長の小西さんがよく泊まり込んでおられて、「勉学することで生まれる勇気と可能性」を教えられました。

教育里親の岡崎さんからも、多くのことを教えられました。これらが、いまの私を育ててくれたと、ほんとうに感謝しております。教育里親の活動を続けておられる皆様が、幸福な日々をお過ごしになられますよう、心から願っております。

世界初。コンパクトな車載浄水装置が 被災地の人々の健康を守る

発案者である、C.P.I.JAPAN 小西会長からの報告

インドネシアでは、今年7月29日に、ロンボク島（バリ島の東隣の島）で、マグニチュード6.4の地震があり、死者500名ほどの被災が出ました。私は、ロンボク島の救援を考えて、インドネシアに8月16日に出張して、現地スタッフとの協議を行い、協働相手の組合省と話しあい、さらに社会活動省（Ministry of Social）と話し合いました。折しも、8月21日に、大統領府から、ロンボク島への国際救援ができなくなる事態が起きていましたから、慎重に進める必要がありました。（JICAも支援を拒否され、ピースウイングジャパンのスタッフも引き上げることになりました。2005年のインド洋津波の際の、国際救援を名目としての数々の問題が、いまだに「トラウマ」となっていると考えます）

結局、9月12日付けの文書で、社会活動省から、2015年に竣工させた小学校用コンパクト浄水機を応用した、「移動救援用の車載浄水装置」の協働活用の了解が得られ、開発後の稼働のさせ方およびメンテナンスに係わる協議をしました。

上記の協議で決まったのは、「C.P.I.JAPANのチームから同省にコンパクト浄水機の寄付を行い、救援活動の主体を同省が行う形にする」ということです。それにより、操作技師給与・諸経費・保管・メンテナンスの安心を確保して、実質的に被災者支援をやすくするということになりました。10月25日を開発完了目標とし、9月14日に日本に帰国しました。

但し、8月中旬のパブリシティの段階では、まだ「ロンボク島支援」で動いておりました。



情報ボックス

◆インドネシアのロンボク島大地震で、義援金募集のお知らせ◆

インドネシア・バリ島の東となりに位置する観光地ロンボク島でさる7/29にM(マグニチュード)6.4の地震があり、多数の死傷者が発生。8/5午後にもM7.0の大きな地震が発生しました。これらの地震により、少なくとも460人が死亡し、7000人以上が負傷、バリ島でも揺れが観測されています。多数の建物が崩壊し、避難民は数十万人に上るとみられます。

これらの大被害報道に接し、インドネシアで長年、子供たちの教育援助活動を手掛けてきた東京都認定NPO法人、C.P.I.教育文化交流推進委員会、本部は東京三鷹市、小西菊文会長は、このほど、読者及び日本国民に対し、義援金の募集を開始しました。口座番号等は次の通り。一人でも多くの方々のご支援ご協力をお願いします。

◎郵便口座：記号 00180 番号 9405237 名義は C.P.I.教育文化交流推進委員会

【注1】郵便振込票の通信欄には「ロンボクギエン」とお書きください。また、寄付控除証明書をお送りしますので、お名前、住所、メールアドレスを、正確にお書きください。

【注2】義援金は、C.P.I.との協定により、インドネシア中央政府・組合 & 中小企業省と共同して、働き手を亡くした家庭の救済にあてられます。使われ方は、本欄で後日、報告します。

C.P.I.JAPAN と、コンパクト浄水機の共同開発をして下さった技師・応用開発チームが、ITB（バンドン市）から、我々の滞在宿舎に近いスマランのディポネゴロ大学（UNDIP）に拠点を移して

いたのは幸運でした。8月の赴任以来わずかの間に、9月12日の社会活動省との協議内容が固まったのは、私たちが既に技術的には応用開発ができる状態にあったからでした。

そうこうするうち、9月28日にはスラウェシ島中部を、マグニチュード7.9の大型地震と大津波が襲いました。死者1400人以上、行方不明者5000名という大災害となりました。

社会活動省からは、「ロンボク島、スラウェシ島と東部の被災は相次いでいる。移動型のコン

パクト車載浄水機の開発を急いでもらいたい。日本内での支援もお願いしたい」との連絡が入り、先の新聞広報に加えて、10月に行う「日本インドネシア市民友好フェスティバル」を機会に広報活動を行うこととし、国内の報道機関にも応援を強めて戴くよう申し入れました(➡P8)

このプロジェクトはインドネシアの有名大学と社会活動省と手を携えた活動です

今回の装置の元となったのは、2012年に開発を始め、2015年から設置を始めてきた、小学校用のコンパクト浄水機です。最初のコンパクト化は、ITB(バンドン工科大学)のウエンテン教授の研究室と共同で開発しました。2年かかって、2014年に完成させたのです。ウエンテン教授は、浄水装置の研究ひと筋にロンドンで研究を行い、

その成果と実績をもってインドネシアの有名なバンドン工科大学に来られた方です。大規模浄水装置の実績を応用しての「小学校用コンパクト浄水機の開発を」と提案し、共同開発したのです。もっとも、開発費はすべてITBで負担して下さいました。インドネシアの大学は、社会貢献に予算を割かれて、素晴らしいことです。

ところで、日本のODAで、浄水して飲料水を一日3万人に配給できる車載浄水装置が途上国の被災地に派遣されていることは知っていました。ODAで使われているのは次のようなものです。



しかし、そのような装置は大型のトラックへの車載となり、通ることのできる道は限られています。被災地にすんでいる住民のいる地域は、

細い道ばかりで、大型トラックは道を塞いでしまいます。

我々の応用技術チームが小学校用の浄水装置を応用して建造した、最初のトラック車載浄水装置も、ウエンテン教授の弟子たちが、ディポネゴロ大学で2016年に造り、被災地用でしたが、やはり道を塞ぐことが問題でした。



また、被災地の貧しい人々が、ポリタンクで運べる範囲の世帯数は、二千世帯が限度です。車がないのですから。ですから、一日に5000リットルの美味しい飲み水を配給できることが、必要で十分だと思います。移動救援用で、小回

りが効くものとなると、オートバイでコンパクト浄水装置を移動させるものが最適になります。

発電機を搭載して、自家発電で浄水機を稼働させるようにしたいと考えました。本誌の冒頭のページに掲載した写真にあるものです。

10月25日に車両の稼働テスト、池や川から取水して浄水した飲み水の分析を終えました。11月1日にジャカルタの社会活動省の下水溝から取水した水の浄水を行い、試飲会をしました。

同省計画局長はじめ職員の皆様の評価は、「これは美味しい」でした。大成功です。

11月1日に社会活動省との協議が成り、同省への寄贈書面に署名を行いました。

下の写真は、同省計画局長のアディさんが、分析を終わった水を安心して飲む様子です。

また、車載浄水装置の登記は、社会活動省傘下の LINJAMSOS (同省管轄の設備・車両の管理を行う局) 名で行うことになりました。LINJAMSOS の本部はジャカルタにあり、各地の市および県に地方局があります。この段階で、救援はスラウェシ州に於いて「中央政府が認めた国際 NGO に限り、政府との協働で行う」ということになり、我々の準備が適合したことになりました。

稼働を始めると直径 150 km の大きい範囲を



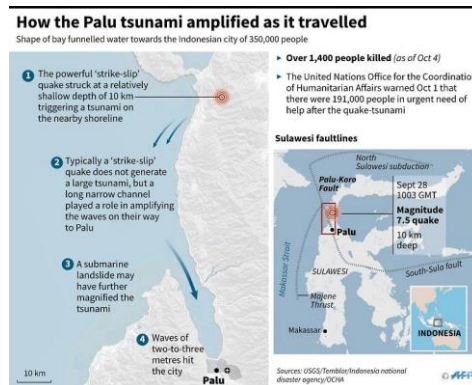
Channel NewsAsia 出典:災害直後の写真

カバーすることになりますので、早急に 10 台の車載浄水装置の建造が必要です。

建造予算は、10 台で 3,600 万円になります。

後日に財務省から、寄贈についての手続きが正式にできました。これで、被災地での保管・ガソリンの確保・車両と浄水機のメンテナンス・稼働させる技師の給与が、社会活動省同省の予算から出して戴けることになり、ようやく稼働の安心を確保できたのが、11月25日過ぎでした。

日本からも、ご支援をお願いします。



パル市、ドンガウラ県、スィギ県が対象地域



「これは、美味しい」とアディ計画局長



教育活動省との協議が 11 月 1 日に成立し(上)、下水溝から浄水した水の試飲会が行われました(左)

インドネシアに車載浄水器寄贈
日本の NPO と現地大学開発

日本の NPO 法人とインドネシアの大学が共同開発した車載可能な浄水器が、11月1日に同法人の小西理事長(写真右)と同法人代表の共同記者会見で発表された。同法人は、同法人の小西理事長(写真右)と同法人代表の共同記者会見で発表された。同法人は、同法人の小西理事長(写真右)と同法人代表の共同記者会見で発表された。

この時点では、救援対象地域をスラウェシ中部に移すと決まっていたが、突然だったので、メディアの編集部への変更連絡が間に合いませんでした。

メディアにも取り上げられました

この時点では、救援対象地域をスラウェシ中部に移すと決まっていたが、突然だったので、メディアの編集部への変更連絡が間に合いませんでした。

メディアにも取り上げられました

「日本インドネシア市民友好フェスティバル」 の趣旨が、メディアにも浸透してきました

趣旨は
明確

例年、日伊市民友好フェスでは、C.P.I.理事会和協力する実行委員会を設置して、チャリティ活動支援を来場者に訴えてきた。今年も、インドネシアの小学校にある井戸水の自然毒を浄化する施設を来年2019年に設置するために、クラウドファンディングで資金援助を呼び掛ける。

1号機は、東ジャワ・スラバヤ空港の近くの小学校に2015年3月に設置したが、市販のミネラルウォーターよりおいしいので、小学生だけでなく、地域の人々も汲みに来るといふ。

第2番目の施設設置については、現在インターネットのクラウドファンディングを利用して、資金獲得を急いでいるところだ。フェスティバルのホームページから「クラウドファンディング」の箱を開けば、8月12日から支援要領を見ることがができる。



市民の意思で支援して下さる皆様、厚く感謝を申し上げます

パソコンで、日本インドネシア市民友好 を検索して
クラウド・ファンディング をクリックして下さい。

スマホの方は、QRリーダーをダウンロードして、この



QRコードを読みこんで下さい